コロンビアからの便り　January 2004

コロンビア派遣の小谷彩子さん　隊次：14-1　職種：ソーシャルワーカー

高知県青年海外協力隊OB会のみなさんへ

明けましておめでとうございます。コロンビアに来てもう1年半、気がつけば早くも帰国の年になってしまいました。

平成14年7月、協力隊OB会の皆さんに激励のお言葉をかけていただきながらコロンビアにやってきました。今まで海外旅行はもちろんのこと、1度も日本から出たことのなかった私にとって、コロンビアでの生活は毎日が新しいことばかりで、大変良い経験をさせてもらっているとつくづく感じます。

しかし、楽しいことばかりではなく、たまには日本や家族がとても恋しく感じたり、自分の活動に疑問を持つことも少なくありません。でも、今自分が感じていることすべてが私にとってかけがえのない財産になるのだと思い、毎日を大切に過ごしています。

コロンビアと聞いて、まず第一に思い浮かぶのはゲリラ、誘拐、コーヒー、といったところではないでしょうか。最近、ずっと誘拐されていた日本人の方が射殺された形で発見された事件も、記憶に新しいと思います。コロンビアの死亡原因の第一位は殺人です。日本ではどう考えても人事のようにしか感じられなかった「殺人」や「誘拐」という言葉がここでは本当に身近なこととして感じられます。私の知り合いであるコロンビア人からも、家族や親戚が殺された、誘拐されたという話をもう3回以上は聞きました。そう考えると、コロンビアという国は本当に暴力と殺人が日常化している非常に危険な国、というイメージを拭うことはできません。

しかし、そういう現実もある反面、コロンビア人は非常に人懐っこく踊りが大好きで、ラテンアメリカ人の持つ陽気で明るい性格をも備え持っているのです。ですから、日常生活していくうえで関わるコロンビア人たちはみんないい人ばかりで、毎日を楽しみながら生きているというイメージを持ちます。

私のコロンビアでの活動を少し紹介します。私の配属先は、貧困地区に住む子どもたちや妊婦に対して低料金で昼食を提供するNGOです。市内に各17個のレストランを持ち、毎週月曜日から金曜日まで、一食約6.5円で昼食を提供しています。私はそのNGOでソーシャルワーカーとして活動を行っていますが、主な活動としては昼食時に各レストランに行って子どもたちと関わったり、話を聞いたりすること、問題を抱えている家庭を訪問し、NGOとしてできる援助を考えていくこと、子どもたちに対するレクレーション、人間としてよりよく生きていけるための勉強会などを行うことが主な活動となっています。

どこの国もそうなのかもしれませんが、コロンビアも例に漏れず貧富の差が激しい国です。一方では何不自由なく快適な生活を送っている人もいれば、その日の食べ物さえ確保することができない人たちもたくさんいます。すべてが平等な日本で育った私にとって、この貧富の差というものは到底理解できるものではありませんでした。

しかし、現実に天と地の違いの中で生活している人たちがいるのです。どうすればその差をなくすことができるのか、それはとても難しい問題であることを最近つくづく感じます。お金がある人はその財産を一生守っていきたいと必死だし、貧乏な人はどうがんばってもお金がないと大学に行くこともできず、いい職業につくこともできません。人間は基本的には平等であるはずなのに、コロンビアではどの家庭に生まれたかによってその人間の歩む道がある程度決まっているかのようです。

このことを考えると、空しいというか、悔しい気持ちでいっぱいになります。コロンビアで何かしたいと思って日本から来たけれど、自分にできることはとても限られていて結局何もできないのだと思うと、何のためにコロンビアに来たのかと自問自答してしまいます。私は後半年で日本に帰ります。日本に帰ったら、平穏な毎日が保障されていて、私は食べ物に困ることやゲリラに脅かされることはありません。でも、ここの人たちはこの生活がその人のすべてなのであって、そこから逃げることはできません。そう思うと、自分がここに来た意味というものを考えずにはいられません。

私の感じるままに文章を書いたので、非常に偏ったものとなってしまいました。しかし、私はこのようなことを考えながら毎日をコロンビアで過ごしています。任期もあと半年。この半年で、さらにどのようなことを感じ、どのような経験をするのか分かりませんが、自分なりにコロンビアというものを体いっぱいで感じながら生きて行きたいと思っています。最後になりましたが、皆さんにとって、2004年も実りのある良い年となりますように。この夏、高知県に帰ることを楽しみにしています。